

# 大澤雅休先生

棟方 志功

大澤雅休先生ノ偉大ハ卓絶ノ姿デアリマス 書ニ於イテ 亦ソノ人生  
ニ於マシテ 全フセル<sup>ダイダイ</sup>擡大デアルトイフバカリデス 今モアノ偉大サガ  
ツツイテ宇宙<sup>シヨ</sup>ニ書 サレテ居ル雅休先生ヲ興<sup>オコ</sup>スノデス 憶フナゾト言ヒ  
ナイ程 雅休<sup>マサヤスシヨ</sup>書ハ 生キツツアルカラデス アノ極リ知ラナイ<sup>ユクウ</sup>虚空ヲ仰  
イデ大澤雅休先生ノ書遊戯三昧ヲ觀ジラレルノデス 書ハ字<sup>ジ</sup>シテアル事  
ガ書デアルトイフ事ヲ雅休先生ハ躰<sup>オコナ</sup>デ示シテキマシタ 行<sup>ゴウ</sup>ウコト業シテ  
キル雅休先生ハ鬼ノ様デシタ 佛<sup>ブツ</sup>ノ様デシタ 神<sup>ジン</sup>タル様デシタ 書<sup>シヨ</sup>  
<sup>ドウドウ</sup>瞳々ノ世界ヲ引具シテ ア、マデ<sup>ゴウ</sup>歎喜ニ炎エテ書業ヲ成ス 廣大無邊ナ  
<sup>ヒビキ</sup>韻ニ生キツツケテ居ル他人ヲ識リマセン 立派ナ 真正<sup>シン</sup>直ナ書生命ニ輝  
ヤイテキルヲ<sup>オガ</sup>拝ミマス 哭クニ <sup>アラタ</sup>灼カニ 開神 マタ悦躰イタシタノデ  
ス <sup>ツ</sup>憑ク様ニ書ニ身上ヲ懸ケ通シタノデス 生キナガラ 星ナガラ通シ  
ツツケテキルノデス ドウトモナラナイ<sup>カン</sup>藝業ノ乾坤ノ間 大澤雅休先生  
ガ 號禮ヲ執ツテキル様デス ソレコソ書<sup>シヨシヨイ</sup>所以ト存ジテ ソレヲ仰ギツ  
ヅケルバカリデス コノ間<sup>カンゴウ</sup>仰<sup>バ</sup>の場コソ コノ道<sup>ミチミチ</sup>々コソ容易ナラナク貴ト  
イノデス 大澤雅休先生ノ頂門ノ針ハ 永遠ノ真理ト 法則トヲ<sup>コイネ</sup>冀ガツ  
テ不滅 不却ト輝キツツケル大針デアリマセウ

棟方志功伏記

## 兄大沢雅休を想う

大 澤 勇

雅休は鳥さしの名人であった。目白、四十雀、五十雀、山がら、小雀等々およそ野鳥の類は何でもその得意のもち竿でさし捕って飼っていた。鳥さしばかりでなく、はがかけ、ぶっちめおとり、霞網なども名人であった。ひばりの巣を見つけることも上手であった。まだ赤はだかの雲雀の子をふところに抱いてそだてることもやった。この様に雅休の青年期には野鳥を捉えてそれを飼うことが好きであった。毎朝何十もの鳥籠を縁につりさげて、各々にえさを與えて、はぐくみ育てたものである。

時おり蛇に見舞われて、小鳥をのんで籠から出られなくなった青大将などがとぐろを巻いて居たこともあったが、それを見た雅休の怒りは恐ろしいほどであった。

小鳥ばかりでなく雅休はモルモットを飼い、兎を飼い、鶏を飼い、犬を飼い、猫を飼い、そして彼等を愛した。又雅休は野草を愛した。妙義山の岩松を移植し、赤城山の蠅取歯朶をほってきて庭に植え、近所の山から破れ傘や石南花、その他私には判らない名前の植物を何百種となく植えて彼等も愛した。

従って、野草の名前なども実に良く覚えていて、私と歩いている時など、路傍の草を取ってその名を教えて呉れたものであるが、一寸した道のりの間にも数百種類の草を取って一々その名前をあげて教えてくれたものである。

雅休がそうゆう勉強を何時したのか私は覚えていないが野草や、野鳥に関する知識は相當のものであった。雅休はなお、魚とりの名人でもあった。貧農に育った私達は良くさで網を持って川へ魚を獲りに出かけたものであったが、網等は使わずに、素手に大きな鯰やギュータや、うなぎ等をつかまえたものであった。近所の鳥川等えはよくひばりに出掛けた。

ひばりの獲物は、うなぎや、せいなまず等の大きなものが多かったが、雅休のとり高は何時も、他を抜きんでたものであった。雅休は又スポーツにも得意であった。相撲はなりの小さいのに關らず手取であった。

田舎での草相撲にはよく澤山の褒美をもらったものである。雅休はまた体操の先生で鉄棒などは実に上手かった。大車輪が得意であったが、その為には大怪我をして私に毎晩ぬり薬を塗らせたことなどがあつた。その様に雅休は器用であった。

絵も上手かったし、歌や俳句や文章も作家として各々の部門に認められておつた。器用という面から見ても雅休は確か器用であった。

百姓仕事も実に器用なことをやってのけた。

書道界では雅休の書を実に不器用なものとして皆が認めていたが、雅休のそうした器用さが書の上だけでは不器用と言われる程にしか見えないマチエルであったかどうか早計に言うことは出来ないと思つている。寧ろ雅休はそうした器用さを極端に制御して、性来器用すぎる程器用であったが為に、勉めて不器用を表現したのかもしれない。彼の書作の上に確かにそうゆう面が窺われる。

雅休は読書家であった。私の知る雅休は何時如何なる時でも本を片手に持たない時はなかつた。勤めの行きかえりにも必ず本を読んでいた。その為には何度川の中に轉り込んで泥ねずみになって帰ってきたか、数えきれないほどである。寒い晩は、薄いせんべい布団の上に本を重ねて眠つた。再び言う。雅休は何時如何なる時にも本を読んでいない時はなかつたのである。

私の知る限りに於いては一。

従って、何時も夜更かしをした。普段の晩でも一時二時までは宵の口であった。

私は雅休と十二も年が違った所為もあるが常に可愛がられた。雅休が兵隊に行っていた時、私はよく面会に行ったものであったが、その帰りによく五銭玉をもらったものである。五銭といっても軍隊から貰う給料は一日一銭何がしとのことで、五銭だせば手袋を買って釣銭が来て、その釣銭で鉛玉を買って一里何がしの道をしゃぶり乍ら歩いて帰れたものである。

雅休と私とは良く気があった。雅休が歌や俳句や文章を書けば私も何時所にそれをやった。

私が油絵を書けば、雅休も油絵をやった。雅休が書を始めれば、私も書を習った。そんなこんなでお互いに誰よりも認め合った。

今こゝに雅休を幽冥の地におくって既に二年、私は虚脱状態に陥って何を成すことも知らずに悲嘆にくれて居た次第である。この度、姉イヨとこの作品集の刊行に着手したのであるが、ともすればその虚脱状態が私の時間と身体とをむしばんで仕事の進行に頗る支障をきたした。

従って編集上、手抜りの多い事は承知している。若し私が今後長生することが出来たならば、もっと充実した雅休作品集を再び計画することであらうが、今は体力的にも物的にもこれで一杯の仕事である。

雅休の作品は総べてが未完成である。私にしてみればその未完成が実に嬉しい。昭和の書芸術の上に一つの新しい方向を開拓しようとした雅休。その雅休の未完成作品の一部分を送って皆さんの愛顧を賜らば、雅休並びに雅休につながる者の喜びとするところである。

終わりに本集編集に際し、平原社有志の暖かい支援と在京同人のお力を多分に頂いた。特に棟方志功先生には装幀や序文をいただけて、生前も一方ならぬ御交誼を辱し重ね重ねの有難さである。雅休のよろこびや如何にと感無量である。また伊福部隆彦先生には生前一度も会って居ない雅休のためにこころよく序文をお書きいただいた。先生は雅休芸術の最初の発見者である。而も先生は雅休なき平原社の今後についても、何くれとなくめんどろを見て下さることを約されているのである。地下の雅休もさぞ安心して居るであろう。併せて有難い極みである。

最後に本集刊行に当たって、清雅堂主人広瀬保吉氏に一切の面倒を見ていただいたことを特記しなければならぬ。私達素人ばかりの手で始めた本集出版がすっかり行き詰まってどうにも仕末ができなくなった時、ふと私は広瀬氏に相談を持ち込んで見たものであったが、氏は即座に協力を承知してくれた。この時位有難かったことは近来に無い。

本集がこのように順調にとりこぼれたのは、ひとえに広瀬氏と、長年氏の仕事をして来られた各部門のエキスパートが腕によりをかけてやってくれたお陰である。

本集題名についても偶然棟方先生のアトリエを訪れられた柳宗悦先生が、もっと重々しい名前にしたらと迄言って下すったそうである。

丁度姉がその話をきいて来たので、それでは「大沢雅休墨蹟」としようかと考えたのであるが、結局平凡な作品集で充分だと思い直し、先生のお言葉はこれまた有難いが強いてそむいた。

このようにしてすべてがみんなみんな、ありがたさであふれている。そしてその感激のうちに本編集は生れ出る運びとなった。

大沢雅休の肉體はすでに焼却されたが、こゝに、新しく、永劫に生れ出るのである。貧しく拙なく、みすぼらしい乍ら、兄さん、ちっとばかりよろこんでくれ。

七月十三日

愚弟伏して記す

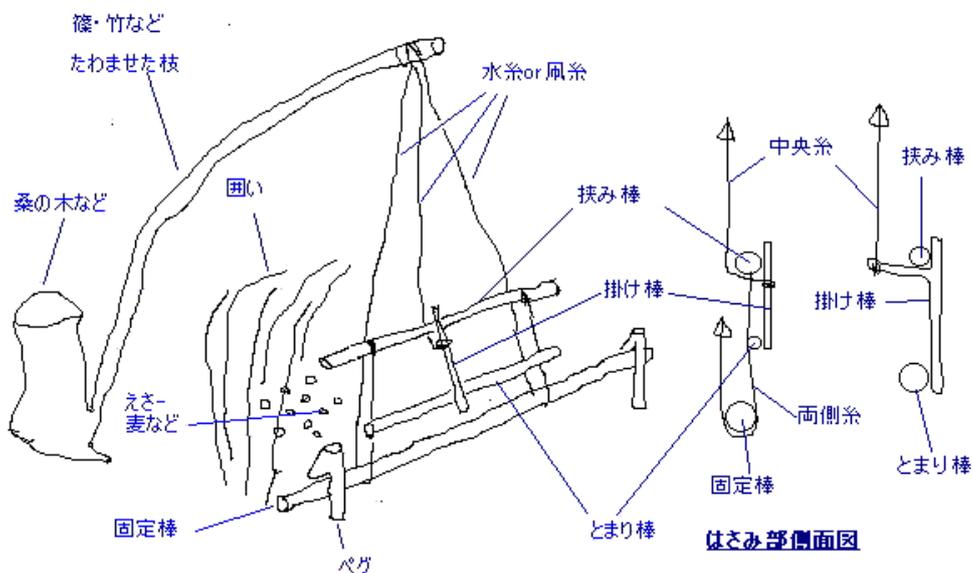
『大沢雅休作品集』後記より

# ことばの説明/群馬県のことば

<sup>さし とりもち</sup>  
**鳥刺し:** 鳥 鷄などを使用して鳥類を捕獲する行為。鷄竿（もちざお）と呼ばれる先端に鳥鷄を塗った長い竿で、これで小鳥を「刺す」（くっつける）ことで捕らえる。

## はがかけ

**ぶっちめおとり:** ぶち殺すための罠。「ぶっちめ」とは、「ぶち殺す」などと用いる接頭語の「ぶつ」を「締め」に付けた言葉のようです。なお、「ぶっちめ」の構造は下の図のようで、鳥を獲るのに使用したようです。止まり木をつくり、餌を取り付けておくと鳥や獣が取れます。大きな木を利用すれば、大きな獣も獲る事が出来る仕掛けである。



**ぶっちめの図(改)**  
従来のメカに記憶違いで誤りがありました。

とまり棒は両側の張った糸と掛け棒の下端に挟まれて危うくとまっている。掛け棒は繋がれた中央糸と上端部で挟み棒を支え中央糸の張力でとまり木を押さえている。とまり木に鳥・動物が乗るととまり棒は落ち掛け棒は内に回転して挟み棒が外れて固定棒に対して急激にします。

**霞網(かすみあみ):** 主に野鳥を捕獲することを目的とした網のことである。日本においては野鳥の保護を目的として鳥獣保護法によって許可を持たない者の使用は 1947 年より禁止、1991 年より販売・頒布・捕獲目的の所持も禁止となった。

**妙義山、赤城山、榛名山:** 群馬県内のこれらの山々は上毛三山じょうもうさんざんと総称されている。

**蠅取菌朶:** ハエトリシダ、**破れ傘:** ヤブレガサ、**石南花:** シャクナゲ

**ひぼり(「ちぼり」ともいう。):** 魚とり方法の 1 種。夜に、たいまつや懐中電灯を持って浅い川に入り、眠っている魚をヤスで突いて獲る。昔の電池はすぐに放電してしまうので、松明(たいまつ)を使った。松明には、松の根っこの油を含んだところを割り、金網で作ったザルの中で燃やすため、大変明るく、長持ちですが、暗くなったら、燃料を補給する。

**さで網:**竹や木の枝でワクをつくり、網を張ったもの。最近塩ビパイプのワクのもが売られている。魚を追い込んでとったり、岸辺からおおいかぶさっている草の間をさぐったりするのに適しており、柄がついていないので、水の中に入れて使う。



**ギュータ(ギバチ):**ナマズ目ギギ科ギギ属、西毛地域では方言でギュータという。主に水生昆虫などを食べ夜行性の傾向のよう。口ひげはナマズが4本であるが、8本あり、尾びれは浅く2叉し、背びれと胸びれには硬い棘があるため、手に刺さると痛い。捕まえると胸びれと付け根の骨を擦り合わせてギューギュー鳴く（音を出す）の



でギュータと呼ばれるらしい。

水のきれいな場所を好み、石の下などに隠れるので、河川工事などで川床があれて、石の隙間が泥で埋まってしまうと、てきめんに姿が見えなくなる。

**せいなまず:**生きた鯰のことか。

**マチエル:**一般的に「マチエール」という。絵の表面の質感の事で、画肌、テクスチャともいわれる。

**柳宗悦(やなぎむねよし):**明治22年(1889年)~昭和36年(1961年)民藝運動の提唱者。宗教哲学者。日本民藝館初代館長。濱田庄司や河井寛次郎との交流をはかりながら民藝の普及につとめ、日本民藝館を創設。

# 大沢雅休略年譜

年号	西暦	月日	事 歴	年齢
明治 23	1890	12/17	群馬県群馬郡大類村柴崎 1 2 番地（現 高崎市柴崎町 1623 番地）の農家の長男として生まれる。本名は、一休和尚にあやかり一字を当て雅休と名付けたという。	1
明治 41	1908	8/31	群馬県群馬郡金島村尋常高等小学校代用教員として奉職する。ロシア文学、社会主義思想に関心を持つ。	19
明治 42	1909	9/1	群馬県群馬郡倉賀野小学校に転任し、自宅より徒歩で通勤する。洋画、文学の友と交流し、油絵を描く。また、俳人仲間から王 羲之、歐陽詢、褚遂良や虞世南を知り「十七帖」「蘭亭序」「草訣百韻歌」「孔子廟堂碑」を独学で習う。	20
明治 43	1910	3/31	群馬県群馬郡倉賀野小学校を退き、群馬県群馬郡柴崎村青年実業団労働組合を結成する。文章、詩歌を書き始め、また園芸、養鶏、農村問題等を研究する。	21
大正 2	1913	12/1	兵役を満期し除隊。郷里の群馬県群馬郡大類小学校に奉職する	24
大正 3	1914	2/11	高崎市紫苑会で、村上鬼城、村上衎魚（正岡子規門下）により広く文学の教えを受ける。	25
大正 5	1916	4/9	栃木県那須野開墾のため、栃木県金田村安藤開墾村に移住する。 当時、総合文芸雑誌であった『ホトトギス』に俳句や小説「馬の病気」「雨の店頭」「黄昏の那須野」などの文章を発表する。	27
		9	那須野の事業を中止して大類村に帰村し、群馬郡滝川小学校の代用教員となる。検定試験を受け、小学校教員免許状を取得する。堀米イヨ（同校訓導）と結婚する。	
大正 7	1918	2	「アララギ」に入会し島木赤彦の指導を受けるが、12 月には退会する。	29
大正 9	1922	3/31	北海道の原始的な自然と開拓者たちの生活を学ぶため、紋別郡上湧別屯田兵村南湧小学校に赴任し、文芸誌『にほぶえ』を発刊する。橋田東声を知る。	31
昭和 2	1927	10	農民文芸誌『農民』を編集する。このほか「綴り方教育」への論文執筆などと多忙を極める。	38
昭和 4	1929	4	丹羽海鶴に書を学び古法帖により学書に努め、書家の第一歩を踏み出す。	40
昭和 6	1931	8	慶應義塾大学大講堂で日本綴方教育研究会夏期講習会に「口頭綴り方」を講義する。	42
昭和 7	1932	3/31	教育著述の『体験を語る綴り方の諸問題』を出版する。渋谷区幡代国民学校に転任する。	43
昭和 8	1933	7	比田井天来に書を学ぶ。	44
昭和 9	1934	8	書学院第 3 回講習会に際し、書学院の助教授に抜擢される。上田桑鶴らの書道芸術社に同人として加盟し、「書道芸術」誌上に書作、書論を展開する。	45

昭和 12	1937	7	比大天来が創設した大日本書道院の第1回展で、天来単独審査により最高賞特別金賞を受賞する。書学院教授となる。	48
昭和 13	1938	2/21	平原社を結成し、主宰する。大日本書道院参事審査員を委嘱される。	49
昭和 19	1944	4/1	新宿区幡代国民学校3年1組を担当する。短歌誌『野菊』は、4月号で最終巻となる。	55
		8/19	学童疎開のため、静岡県修善寺土肥に赴く。(土肥温泉 土肥館)	
昭和 20	1945	4/13	東京空襲・下落合の住宅が破壊され、爆風で負傷する。	56
		4/18	修善寺土肥から富山県東礪波郡太田村久泉(現 富山県砺波市久泉)の光圓寺に寮長として学童疎開の引率してくる。	
		5/25	250機のB29が東京西部の焼け残った地域に飛来し、焼夷弾による波状絨毯爆撃を行ったため、蔵書や家財の一切が灰燼になる。この報に大きく落胆する。	
		11/5	富山県から集団疎開児童と共に帰京する。	
昭和 25	1950	8	書道講習会(埼玉、茨城、富山、宮城)	61
		10	書道講習会(富山)	
		10/10	書の径の会(正木昭宅に設置)顧問:大澤雅休、大澤竹胎、中島邑水、武士桑風、平山魯近、小澤高一郎、宇山宇朴、表立雲、山本聿水、峠初郎 本部長: 峠初郎 「日本の美事なる芸業妙韻の内に、書のあるのを歓喜とする者達が集い、そのよろこびを更に大きく高く致しところを念願かけて進み、應ぐる集まりを私達はつくった。 老いも若きも幼きも、皆そのよろこびの悠然は同じ方集まりもその通り勿論とする。 私たちは、書のありがたさに感激の華徑をゆだねて、ひたすらにその想いと達成をいそしみゆくよろこびを、ここに集い書してゆけばかりだ。」	
		11/25	東京学芸大学で文部省書方指導要領講習会の講師として招聘され、講義をする。(～27)	
昭和 26	1951	2	第4回書道芸術院展に「深山大澤」「虚空無辺」「ぎゃわろ」を出品する。	62
		6	書の径の会の顧問である山本聿水が高崎市へ移住転進する。	
		8	書道講習会(宮城、群馬、富山/福光、高岡、砺波、福島)等で開催する。	
昭和 27	1952	8	講習会(石川、富山、宮城、千葉)	63
		10	21年間奉職した幡代小学校退職し、港区青山中学校の講師となる。	
		11	日本美術展覧会に委嘱作として「山嶽重疊」を出品する。	
昭和 28	1953	4/2	杉並区高井戸1-65の平原社本部に各壁、襖、扉などに、棟方志功の倭画で充満させた。	64
		8	日本美術展覧会(日展)の委嘱作、「黒岳黒谿(二曲屏風)」を制作するが、絶筆となる。	
		9/12	夜、門人矢野医師に手本執筆中、狭心症で倒れ、同夜に死去。	
		11	日本美術展覧会(日展)に委嘱作として「黒岳黒谿(二曲屏風)」を出品するが、陳列拒否となる。	

## 主な参考文献

- 低学年の創作進路「口頭綴り方の実際」 大澤雅休著 昭和6年9月  
野菊歌集 若菜集 大澤雅休編 昭和5年8月  
歌集 平原 大澤雅休著 昭和55年9月  
歌集 平原一路 大澤雅休著 昭和61年5月  
大澤雅休作品集 大澤イヨ、大沢竹胎編 昭和30年8月  
大澤雅休書論集 大澤雅休書論刊行委員会 昭和53年9月  
大澤雅休書話 大澤雅休書話刊行委員会 1981年8月  
古法帖解題—書話刊行に想う— 大澤雅休書論刊行委員会 1981年8月  
定本 大澤雅休・大沢竹胎の書 教育書籍株式会社 昭和56年8月  
臨学名品体系 4「大澤雅休 傳山草書帖」 桑原呂翁ほか編集 昭和62年7月  
太田村史 太田村史編纂委員会 平成3年10月  
紅葉独語 -太田校史- 藤井武雄著 平成8年1月  
郁文—太田小学校九十年の記録—「第四部 昭和後編」  
    砺波市立太田小学校創立九十周年記念事業実行委員会 昭和40年10月  
群馬文学全集 第12巻「群馬の歌人」 群馬県立土屋文明記念文学館 平成14年11月  
みやま文庫 78「泰一郎・きち・雅休」 みやま文庫 昭和55年7月  
磯部草丘・大澤雅休展 群馬県立近代美術館 昭和57年8月～9月  
棟方志功「書の奇跡展」 富山県南砺市立福光美術館 2004年5月～6月  
月刊『日本美術』通巻127号 株式会社日本美術社 昭和51年3月  
時刻表 第21巻第3号 社団法人日本交通公社 昭和20年9月

### 大澤雅休展実行委員

委員長 入道 忠靖

委員 尾田 武雄(太田郷土懇話会員)

安念 幹倫(砺波市立太田公民館文化部長)

金子 容士(太田郷土懇話会員)

上田 北山(COSMOS 書会代表)

事務局 間馬 秀夫(砺波土蔵の会理事)